

地名からの連想

大和道の 吉備の児島を

過ぎて行かば 筑紫の児島

思ほえむかも

(巻六一九六七)

右の歌は、大伴旅人が大宰帥と大納言を兼任することとなり、大宰府から都にもどる際に詠んだもので、遊行女婦である児島の歌(巻六一九六五・九六六)にこたえたものである。この児島の歌(九六六番歌)には左注があり、その左注によると、大伴旅人を見送る大宰府の官人たちに混じって、遊行女婦児島がおり、その児島が旅人との再会が困難であることを悲しみ歌をよんだものとされている。これらのことをふまえ、九六七番歌を意識してみると、「大和へ向かう道の途中にある吉備の児島、その児島を過ぎて行く時には、

同じ名を持つあなた(遊女の児島)のことが思い出されることだろうなあ」となる。

この歌の持つ特徴の一つとして、地名である吉備の児島から、同音の筑紫の児島(遊女の児島)を連想している点があげられよう。

この吉備国の児島については、当該歌を理解するうえで、大変興味深い資料がある。それは以下に示した、『筑後国正税帳』(天平十年・七三八年)の記事である。

依勅還郷
防人、

起 筑紫

大津 迄備

前児嶋、

十箇粮、

春稲

壹仟伍伯

肆拾捌束



大宰府政庁跡 (写真提供：松尾光さん)

この記述は、勅によって、防人を郷里(おそらく東国)に帰す際のものであろう。ここには、筑紫大津から出発して備前国児島に到るまでの十日分の食糧として、春稲一千五百四十八束と記されている。この記述は、当時の吉備の児島が、筑紫大津から難波津に到る航路において中継基地としての機能を果たしていたことを想像させるものである。(おそらく児島から難波津までの物資は、児島で補給したのであろう。)

大宰府と都との往来において、船を用いることの多かった当時の律令官人にとって、吉備の児島とは馴染み深い土地であったのだろう。大伴旅人も、吉備の児島に立ち寄ることを念頭においたうえで、この歌を詠んだのではないだろうか。

万葉歌とは、時として我々に古代人の生活や文化といったものに思いをはせるきっかけを与えてくれるものである。

(万葉古代学研究所主任研究員・

大館真晴)